釜ヶ崎からの呼びかけ

越冬支援中間報告

一九八〇年十一月から
一九八一年一月まで

はじめに

今年も釜ヶ崎の冬をおぼえ、全国からいろいろな支援をしてくださったことを心から感謝もうしあげます。

相変らず釜ヶ崎の冬は厳しいです。残念ですが寒さの厳しさもてつだって、行路病死が例年より多いとも聞きます。

十二月二十五日からはじめた越冬支援も約半分が終りました。ここにその間の釜ヶ崎の動きやわたしたちの今年の活動目標をお知らせします。

●一人の結核患者の完治を追い求めます。
●そのために、結核ケースワーカー・専従者にフルタイムで働いていただきます。
●募金目標は六〇〇万円です。現在五一五万円です。

さらにご協力ください。

●ボランティア活動には人をお送りください。

八〇年キリスト教釜ヶ崎越冬委員会結成

11月15日 今年は、労働者の方の取り組みも遅れている。本日やっとキリスト教越冬委員会が結成される。代表 小柳伸顕 会計 谷安郎 結核ケースワーカー 入佐明美がきまり、専任者については次回話することになる。今日はとくに、労働者側の今冬のたたかいについて聞く。越冬闘争実行委員会の中心を担う釜ヶ崎日雇労働組合の代表二名が、説明する。内容は、これまでと大してちがわない。行政に対しては、高齢者、病弱者、「障害者」の特別対策を要求する。また、日雇労働者の現役層がかかえている問題にも取り組む予定なので、越冬期間中も賃金未払いとか、不当な飯場との闘いにも力を入れると言う。

期間は、十二月二十五日から八一年二月末を考えている。

ちょうど横浜寿町で働く市の職員も参加して、横浜市の越冬対策について話してくれる。大阪市と一味ちがうという印象をもつ。

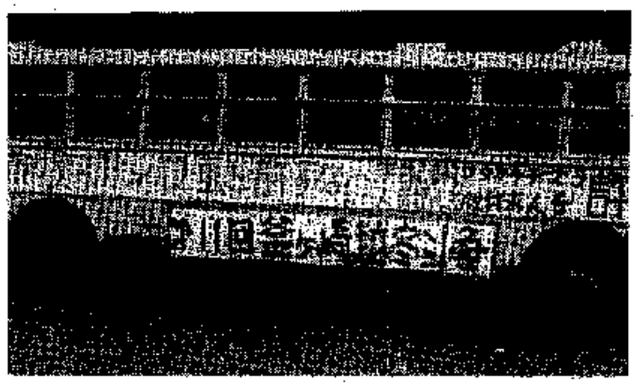
11月22日 第二回キリスト教越冬委員会。今年の越冬へのカンパ目標を六〇〇万円ときめて全国の諸教会またこれまで支援してくれた個人に呼びかけることにする。

今年は、二人の専従者をかかえるので、募金をしっかりしなければならないことが確認される。

十一月末には、呼びかけを発送するように作業をすすめる。

ボランティアのための結核の話 講師山口亘医師

12月8日 キリスト教越冬委員会の七九年度の活動テーマは「釜ヶ崎の病気」であった。そのため越冬後もこのテーマと取り組むため「キリスト教医療連絡会」をつくり五月以来活動してきた。「病気」の重点は、結核にある。そのため、念願であった結核の話を、府立羽曳野病院医師で大阪市の嘱託として西成保健所で結核対策にあたっている山口亘先生にきてもらって話をきく。広く呼びかけたが、午後の集会でもあって、ボランティアの参加は少なかったが、これまで病院訪問、医療相談にあたってきた者にとっては大変参考になった。



大阪市に対して越冬対策で要望書を出す

12月10日 人権週間の最終日に大阪市民生局をたずねて、次の二点について要望書を出す。責任者は、会議で忙しいと不在。係員に説明する。

(一)今冬は、社会医療センターの軒下や路上で、病弱・高齢・「障害」の労働者が、青カン(野宿)しなくてすむ、血のかよった人間尊重の行政を大阪市は、どのようにすすめますか。

(二)結核予防法第二条(注、結核対策の責任は自治体行政にあると義務づけている)をまもり、釜ヶ崎から結核を根絶するために、大阪市は、民間のボランティア活動に甘えることなく抜本的対策をたて、それを明らかにしてください。

以上の二点について具体的な対策を来る十二月二十五日までに文書でご回答ください。

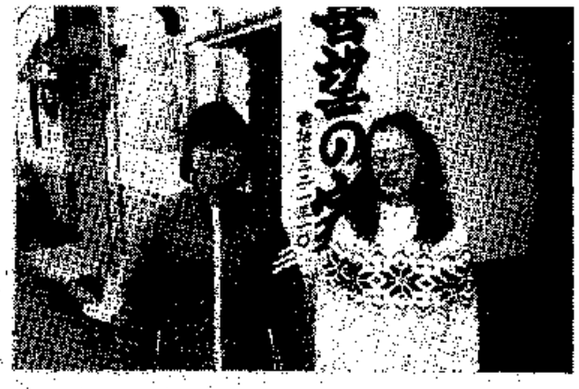
以上の要望に対して、大阪市からの回答は、次のような電話一本であった。「大阪市は、十二月二十九日、三十日に大阪市更生相談所(注・釜ヶ崎の単身労働者のための特別の福祉事務所)で、面接受付けを行い、臨時宿泊所(大阪南港の埋立地のプレハブ)八〇〇人、病弱者は、自彊館に二〇〇人収容する」(12月23日、民生局生活係長より)。

▶昼の炊き出し

保健所は、ほんとに釜ヶ崎の結核を根絶する気があるのか

12月26日 西成保健所と市の結核対策について話し合う。これは12月22日付けで、西成保健所に申し入れた「要求書」についての話し合いで約二時間、西成保健所でなされた。要求は(一)夜間のレントゲン検診、(二)入院必要患者の結核ベットの保障 (三)通院必要患者への通院できる病院の確保 (四)釜ヶ崎労働者の結核入院患者の追跡調査の必要など十二項目からなっている。

回答は、どれ一つとっても、大阪市がほんとうに釜ヶ崎の結核根絶と取組む気があるのかと疑いたくなるものばかりであった。



▶土井さん(右)と入佐さん

釜ヶ崎で残ったもの

入佐明美

「二十年間釜ヶ崎で生活してきたが、残ったものは、前科と結核や」

私は一年間釜ヶ崎で結核に取り組み、ただ結核だけ見るだけでは結核は治らないという事を痛感しました。例えば「結核は伝染病だし、入院してきっちり治しましょう」と声をかけると「がまんし、入院して治すよりは、酒をのんで道で死んだ方がましや」「もし元気になったかて、誰が喜こんでくれるんや?社会のために何になるんや」という声が帰ってきました。

「今日の最大の病気は、らい。でも結核でもなく、自分はいてもいなくてもいい、だれもかまってくれない、みんなから見捨てられていると感じることである」と、インドのマザーテレサは訴えていますが、釜ヶ崎でも同じです。

病気を治し、働きたいという意欲を起させるような援助、それに基づく細かい配慮が、どうしても必要です。

一人の人に対して愛をもってもっと大切にしていくことに心がけ、今年こそは、一人の人が完全に結核が治るようにと、願いつつ努力します。

どうぞさらに覚えて、お祈り下さい。

やはり青カン者は一〇〇人を越えた

12月25日 今日から第十一回釜ヶ崎越冬闘争はじまる。キリスト教の越冬専従者の土井美保子さん（日本キリスト教団能勢口教会員）も、十二月十五日からフルタイムで働いている。

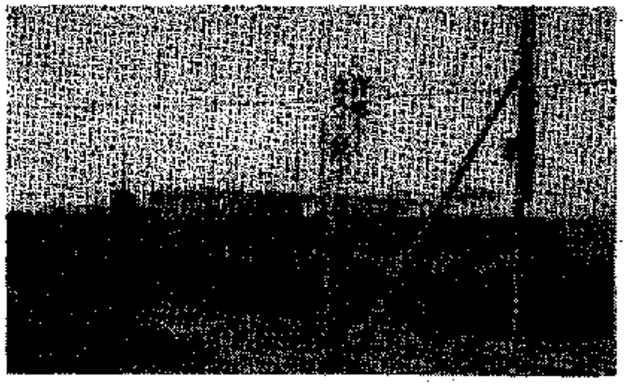
労働者が中心になり朝九時、昼一時、夜七時の炊き出し、社会医療センター前のふとん敷き、夜間パトロール、あるいは病気の労働者への診察依頼券の発行などが始まる。

はじめての夜間パトロール。やはり一〇〇人を越す人たちが釜ヶ崎およびその周辺で青カンをしいられていた。

この日は午後から社会医療センター前に喜望の家に集めておいたふとんを運び出す。越冬闘争実行委員会（以下「越冬実」）から不足という連絡がはいり、暁光会などにも問い合せる。

12月26日 早くも社会医療センター前で青カンする労働者が百十一名となり、全体で百六十六人にもなる。年末をひかえて、仕事が減り、さらに寒さも加わり厳しい。キリスト教のパトロールグループにも十五人の応援が来るが、全体としては、パトロールする側が多すぎるという感想もきかれた。

12月28日 とうとう青カン者は



▶南港臨時宿泊所

だ。八百人近くも入ったのだから、青カン者は、今夜は〇かと思ったら、二百人を越していた。昨日よりわずかに減って二百四十九人。一体、誰が臨時宿泊所に入ったのか。三〇日夜の青カン者も相変らず百八十九人と多い。必要な人は入れない臨時宿泊所。

パトロール日誌より「市更相の相談、時間ぎれで入所できなかった人もいる。寒空の下に枕する人々に春の来る事を祈る」（12月30日）

第五回越冬セミナー開かれる テーマ「釜ヶ崎の医療——特に結核」

81年1月1日～3日 今年も全国から十三名の参加者と共に越冬セミナーが開かれた。今年は、結核ケースワーカーの入佐明美さんが一年の活動（体験）を話した。

参加者の感想から 「今日も明日も路上で人が死ぬ。一年三百人が何らかの形で死ぬ。現代の〈繁栄〉に必要不可欠の存在が、使い捨てのボロクズのように消されてゆく。〈社会構造悪〉という言葉を持ち出しても何の解決にもならない。絶望的な状況がどこまでも拡がる。底のぬけた釜で水をすくうような我々の営み……」（K）

＊　＊

1月2日 新春団結もちつき大会が三角公園で行われる。三百人の労働者が集った。

1月4日 ソフトボール大会。

1月5日 恒例の大阪市の年頭の抗議の後、南港の臨時宿泊所へ。

1月18日 釜ヶ崎の労働者約五十人が、釜ヶ崎銀座を「仕事よこせ」とデモ

一人の労働者の完治を求めて

わたしたちは、ここ数年、越冬を軸にしながら釜ヶ崎の結核と取りくんできた。その具体的な行動が、結核専門のケースワーカー入佐さんの活動である。社会医療センターでの結核患者一〇〇人との面接もさらにその結果をまとめた「大阪社会医療センター通院患者における要入院肺結核患者の社会医学的調査」（一九八〇年十一月刊）もその一環である。

わたしたちは、この越冬をてこにして、一人の結核患者が完治し、釜ヶ崎で元気に働くという夢をもって、今年一年は活動したいと願っている。たった一人といわれようともその一人が完治するためにキリスト教のボランティアグループの持てる力を十二分に発揮したいと願っている。入佐さん、土井さんの働きも今年はそこへ集中させたいし、労働者の家もこの目的を完遂するためにも是非実現させたいものである。

労働者の家の実現へ

入院中の皆さんが、一番強く心配していることは、退院後のことである。入院、療養生活は、「元気になって早く働きに行きたい」が前提になっている。しかし、退院しても（通院治療が必要な場合も）住居が不定なので、本当に暗い気持ちで療養生活を送っている。入院生活中に、「自分の帰っていく家があり、そこで暖く迎えてくれる」としたら、どんなに希望をもって入院生活が送られるだろうか。

次に今年のパトロール中に出会った三人の労働者は、入院が必要と診断されても、ベットが空いていないため入院できず、病苦と闘いながら、働くことも出来ず、飢えと寒さに耐えて青カンをしていた。この人たちが、入院できるまで、この「労働者の家」で病める身を横にしてそのときを待つことができないか。そんな労働者の家の建設の必要性をいま痛感している。

▶医療センターで

越冬委員会 専従として

土井美保子

みなさん　はじめまして

私は、去年の十二月十五日からキリスト教釜ヶ崎越冬委員会の専従として働き始めました。現在、聖和女子大学の四年生であり、今年三月に卒業予定です。

主な仕事は、記録の整理、印刷、電話番などです。毎日、失敗の連続ですが、一つ一つの仕事を誠実に果していきたいと思っています。日々、一人の人間が決して易々と生きれない現実を目の当たりにして、生きることの難しさ、釜ヶ崎のもつ問題の根深さを新たに考えさせられています。また、行政の越冬対策、結核患者に対する対策などを知らされる時、人間としての尊厳性がないがしろにされていることを強く感じます。

越冬後は、入佐さんの働きを支えるよう、病院訪問中心に働きたいと思っています。

これから、私自身の働きをどのように形造っていくかが課題です。

入佐さんに学びつつ、一人の患者さんが自立できるよう考えながら、誠実に歩みつづけたいと願っています。

いつも、回りにいる人たちに励まされ、支えられながら生かされていることを何よりも感謝しています。

どうぞ、よろしくお願いします。

臨時宿泊所には、今年もほんとに必要な人は入所できず

12月29日、30日 例年のように臨時宿泊所の受け付けが市更生相談所ではじまる。朝から労働者の行列。そして附近を機動隊が警備する。何となくものものしい。元気な労働者は、受け付けを拒否される。今年は、福祉の見直しとかで、面接もなかなか厳しいよう

越冬支援連絡とカンパの送り先

大阪市西成区萩ノ茶屋二—八—十八
喜望の家内
キリスト教釜ヶ崎越冬委員会
代表　小柳伸顕
電話　大阪（〇六）六四七—三九四六
郵便振替口座　大阪五〇三八五